

上村松園 ～その美と情念～

原 口 え り

上村松園は、近代美人画史上の上に絶対的な人物であり、近代絵画史上でしっかりとした地位を占める画家である。女流画家の第一人者とされ、女性が生きていくにはまだ困難だった時代に、多くの男性たちに混じって画塾で学んだ。女性の特徴も発揮しながら、大変なハンディをもって画家として優れた業績をうち立てた人物である。この松園を調べていくために、上村松園の生涯・女性であるがための画壇での葛藤・松園の代表的な作品の3つに大きく分けて調べた。

まず第一章では、上村松園の生涯についてとりあげた。幼少時代から世の中に評価されるまでやそれまでの葛藤、女性初の文化勲章受賞・女流画家の第一人者としての地位を確かにしていくまでを、松園の家庭環境や当時の時代を背景として調べた。それによって、松園芸術が生まれるまでの自身の大変な努力と、松園自身の絵に対しての一筋な想いを確認した。また、女性が絵を描いて生活をするということが、周囲の人々の反対にされるという当時の時代環境から女性画家が誕生した背景には、母の大きな理解と支があったということも明らかになった。

第二章では、女性であるがゆえの日本画壇での斗いについてとりあげた。女性であるがための教育機関がまだなく、女性が生きていくには困難な時代であった当時に、足を腫らしながら写生をしたり、女性であるがために嫌がらせを受けたりとの苦難にも耐え、男性たちの中で絵を描き続けた松園の姿を確認した。それにより、女性が生きていくということや絵を描いていくということがいかに困難であったかということや、そのなかで画家として貫き通した松園の精神力の強さというものが明らかになった。また、女性であるというハンディを、反対に魅力的な作品を制作させる力とした強さというものも確認できた。

そして第三章では、松園の初期の頃の作品から絶筆までの代表作の中から、《粧》(1900年)・《焰》(1918年)・《青眉》(1934年)・《母子》(1934年)・《天保歌妓》(1935年)・《序の舞》(1936年)・《初夏の夕》(1949年)について、それぞれの作品に対しての松園の想いと、描かれた背景にあるものについて調べた。作品にはそれぞれに想いが込められており、自分の母が亡くなったときには母をテーマにした作品を描き、恋をテーマにしたときには自分自身の心情も込められている。それによって、松園が描く女性にはそれぞれに、女性である松園自身の想いが一緒に込められていると考えてよく、そのことにより松園の描く美人画が、より魅かれる作品になっているのであるということが分かった。また、強さだけではなく、女性としての繊細な心情をも持った女性であるということも分かった。

以上、第一章・上村松園の生涯、第二章・女性であるがゆえの日本画壇での斗い、第三章・代表的作品の三章に分け、上村松園について論じた。